BORU神話ノート（Netサイトhttps://kachina.studio-kokopelli.co.uk/から）

世界の神話をどう読むか』Ｐ２２

プエブロ・インディアンに属する、ニューメキシコ州に住むズニ族の神話の人類起源譚

　人類の祖先は、大地の体内の四つの子宮のうちもっとも内奥の「出生の場所」で発生した。彼らは蛆虫のような醜い生物で、暗闇の中で蠢き這いまわりながら、もっとよい所へ行きたいと叫び続けていた。そのうちに彼らの形は少しずつ今の地上の生物に近いものとなり、知力もついてきた。そのうちに彼らの中で一人だけ例外的存在だった、聖なる主ポシャイヤングキョが、最奥の子宮から脱出する道を見つけ、
ただ彼にだけ通ることができたその道を、ひたすら辿り続けて、当時はまだ泥沼のようだった地上に出た。そして造物主の太陽に、まだ地底に閉じこめられている者たちを、どうか救いたまえと祈った。

　その祈りに応えて父なる太陽は、大地を取り巻いていた泡に光線を注ぎ、先行者と従者と呼ばれる双児の兄弟を誕生させた。そして自分の知恵の一部を分け与えた上に、虹や雷霆や雲を生じさせる露の楯などを授けて、彼らを世界の支配者にした。彼らは虹を使って天を押し上げ、それから雷霆で大地に割れ目をあけ、蜘蛛の糸を伝って大地の最奥部まで降りて行った。そしてそこで苦悶している生物たちに、自分たちに従い、子宮から子宮へと辛い道程を辿り続ければ、しまいに陽光の輝く地上に生まれ出ることができると教えた。

　彼らは、草や木やつる植物を縛り合わせて、上へ向かって伸びていく生きた梯子を作った。そして先頭に立ってこの梯子を登り、生物たちはみな後について行こうとしたが、大勢が途中で転落した。それらの落伍者たちは、人間になれずに怪物になり、後に噴火によって地上へ吐き出された。その他の祖先たちは、「臍の下方にある場所」と
呼ばれる、大地の第二の子宮に辿り着いた。そこは前に居た場所よりずっと広く、暗さも雲に覆われた夜の地上の暗さ程度だった。そこでしばらく暮らした後に祖先たちは、また苦労して生きた梯子をよじ登り、第三の子宮へ移住した。その途中でもまた多くの者が転落し、怪物や不具者や白痴などになり、後に地上へ投げ捨てられることになった。「大地の膣」と呼ばれる第三の子宮は、生殖行為による誕生の行なわれる場所で、星に照らされた谷間ほどの明るさだ

った。祖先たちはそこで、性の違いを発見し交合して子を産むようになった。それから彼らはまた、生きた梯子を登って、「出生の場所という四番目の子宮に到達した。払暁時の空ほどの明るさだったその場所で、双児たちは祖先たちを教育し、地上に出たらまず太陽を探し、上界での生き方を教わるがよいと諭した。

　それから祖先たちはまた双児に先導され、道を先へ進んで行って、しまいにようやく地上に着いた。彼らはまだ人間の姿に成りきっておらず、うろこに覆われた黒く冷たい皮膚と、尻尾と、梟のような眼と、蝙蝠の耳に似た膜状の耳を持ち、手足の指の間に膜がある、不恰好な生物で、直立できず這って歩いていた。彼らが出現したとき、地上
は夜だったが、夜明けが来て太陽が東の地平線上に姿を現わすと、彼らはそ
の輝きによって盲目にされ、熱に耐えられずに、恐怖の捻り声をあげ、手と腕で懸命に眼を覆ってのたうちまわった。だが彼らは、夜に燈火に引き寄せられる蛾のように、苦しみながらも太陽を眺め、それに少しでも近づこうとしてあがき続けずにいられなかったので、そうしているうちに陽光に少しずつ慣れ、それと同時に次第に直立した姿勢が取れるようになった。そうすると彼らは、おたがいの立った姿を見て自分たちの醜さに気づき、樹皮とイグサで帯を作って恥部をたがいの眼から隠した。

　それから彼らは、地上での生活に必要な文化を学びながら、双児に導かれて旅を続け、長い年月をかけ大地の中心に当たるズニの土地に来て、そこに
住むことになった。この旅の途中で、「聖なる剥奪の場所」と呼ばれるところで彼らは、双児たちによって、指の間の膜と、かつて前足だった手にまだ残っていた踵を取り除かれた上に、尻尾を剃り取られて、完全な人間の姿になることができたのだという。

https://kachina.studio-kokopelli.co.uk/

ホピ族の神話 その1

ホピ族をはじめとしたプエブロ系部族*には「4つの世界」という神話があります。現在は「第4の世界」で第1～第3までの世界は人間の身勝手な行動のために滅びてしまいました。この神話を簡単に紹介します。

参考書籍：Frank Waters著　Book of the Hopi

ホピ第1の世界　トクペラ(Tokpela)

最初の世界はトクペラと呼ばれる終わりの無い空間。創造主であるタイオワ以外何も存在しない。始まりも終わりもなく時間も形も命もない。まず始めにタイオワは無限を有限に変え、生命をもたらすためにソツナンを創った。タイオワはソツナンに陸地と海、空気を創らせた。ソツナンは生命を創る助手としてスパイダーウーマン[コクヤンウーチー] を創りだし、スパイダーウーマンはさらにポクァンホヤとパロンガゥホヤの双子を創りだし、生命に「音」と「動き」をもたらした。役目を果たした双子は地球が安定して回り続けるようにそれぞれ北極と南極へ派遣された。スパイダーウーマンは最初の人類を誕生させ、調和や創造主への感謝を教えたが、言葉を話すことができなかった為ソツナンを呼び出し人種ごとに違う言葉を与えた。最初の人類は増え続け幸せに暮らしていたが、次第にソツナンの教えを忘れ、尊敬の念を失っていった。タイオワはこの世界を壊し世界を創り直すことにした。ソツナンの教えを守っていた僅かな人々はこの世界の出口へ導かれ脱出することができた。人々が脱出した後、タイオワはソツナンに世界を火によって破壊させた。

ホピ第2の世界　トクパ(Tokpa)

トクペラを脱出した人々は地下世界で蟻と暮らしていた。やがて食料が少なくなってくるとソツナンが第2の世界を創り始めた。陸地を作り水を撒き、全てが完成すると人々を招き入れた。ソツナンは人々に教えを守るように言い聞かせた。この世界には人々に必要なものは全て揃っていた。しかしすぐに人々はそれ以上を求め始めてしまった。そして欲にかられた人々は遂に戦を始めてしまった。ある日突然ソツナンが現れ、タイオワの教えを守っている少数の人々を避難させるようにスパイダーウーマンに命じた。スパイダーウーマンは第1の世界の時と同様に蟻の巣へ避難させた。そしてソツナンは両極にいる双子に命じ、地球の回転をめちゃめちゃにさせた。山が壊れ海に落ち、巨大な洪水が起こった。やがて氷の中に全ての命が閉ざされた。これが第2の世界トクパの終わり。

ホピ第3の世界　クスクルツァ(Kuskurza)

何年もの間、第2の世界は氷に閉ざされていたが人々は蟻の巣で平和に暮らしていた。今回は

食料に気を配り食べ過ぎないようにしていた。ソツナンは双子に地軸を元に戻させ第3の世界を創り始めた。海を造り山を置き動植物を創った。準備が整うと人々は蟻の巣から出て来た。第1の世界ではシンプルに動物と暮らし、第2の世界では道具を作り家や村を造った。この第3の世界では大きな街や国を造りあげた。しかしこういった発展はタイオワやソツナンへの感謝の気持ちを薄れさせ忘れさせてしまった。そして人々は再び戦争を始めてしまった。このままでは教えを守っている人々の命が危ういのでソツナンはスパイダーウーマンに救出を命じた。スパイダーウーマンは中が空洞になっている植物の茎の中に人々を避難させ、水とコーンミールを入れ密封した。これと同時にソツナンが世界を破壊するために現れた。巨大な波が山を砕き大陸をばらばらにし、海に沈んだ。 人々が入った茎は長い間海に浮かび続けた。 スパイダーウーマンは蓋を開け中の人々を外へ出したがそこは第4の世界ではなく第3の世界の名残の水だけの世界だった。人々は陸地を求めて日の出の方向へ長い旅に出た。長い旅の末、人々は陸地を見つけた。そこは緑に覆われた美しい土地で長い時間その場所に滞在した。しかしスパイダーウーマンは彼らにこう言った。「ここは第4の世界ではない。ここで暮らすことはあまりにも容易すぎる。これではまたすぐに邪な考えを持ってしまう。先へ進みなさい。より困難で長い道のりを行きなさい。」人々は仕方なく旅を続けることにした。 スパイダーウーマンの役目はこれで終わったため、ここからは自力で第4の世界を探すことになる。東へ旅を続け、遂に大きな陸地を発見し上陸するとソツナンが現れた。「よく辿り着いた。ここが準備していた場所だ。」

ホピ第4の世界　ツワクァチ(Tuwaqachi)

ソツナンは言った。「ここは第4の世界で完全な世界だ。この世界は以前のように全てが美しいわけでも簡単な世界でもない。高さも深さもあり、熱さも冷たさもある。自分達で選び世界を造り上げてゆけ。助けが必要な時は神の声を聞け。」こう言い残してソツナンは去って行った。人々が歩き出すとハンサムな神マサウが現れた。彼は第3世界の管理をしていたが、タイオワに対して尊大になってしまいこの世界の世話係を命じられた。「今お前達はこの世界の西側の斜面にいるが、旅が終わったわけではない。自分達の住む土地を探しなさい。」マサウはこう言って見えなくなった。人々は再会を誓いグループや氏族に分かれて移動を始めた。 こうして第4の世界が始まった。 それぞれの氏族は様々なルートを辿り、現在のホピメサ付近で再

度集結することになる。太陽氏族や蜘蛛、蛇、フルート等の氏族は北のルートを辿り、オウムや鷹などの鳥系氏族は南のルートを辿った。南へ行ったグループの一部は戻ってこずにアステカやマヤの祖先になったと言われている。

*プエブロ系部族

アナサジ（古代プエブロ）と呼ばれる太古の部族から派生した現在の部族の総称。 一般的にはニューメキシコ州の部族（ズニ、アコマ、ラグナ、サンタアナ、タオス等）をプエブロと呼ぶ。文化的にもとても共通する点が多く、ホピ同様カチナの儀式も行われている。

※ホピ語のカタカナ表記について※

ネイティブアメリカンの言葉をカタカナに置き換えることは非常に難しいことです。原文を書いたのは白人であり、耳で聞いたものをローマ字表記にしています。カチナの名前でもそうですが、聞く人によって聞こえ方が違うため、数種類のローマ字表記が存在します。 このローマ字表記をさらにカタカナへ変換するので元々の発音からはかなり離れてしまう可能性もあります。また、日本語にはない発音も含まれますのでカタカナ表記には限界があります。こういったことから固有名詞が他の方の表記と違う場合もあるかと思いますが、ご了承ください。

海を東へ進んで第4の世界へ到達したことから考えると彼らは太平洋を渡ったと考えられます。最初に立ち寄った [緑に覆われた美しい土地]はハワイではないかと思われます。もしかするとホピの祖先はシベリア経由ではなく太平洋を船で渡りアメリカ大陸へ到達したのではないでしょうか。実際北太平洋海流（黒潮の延長）に乗れば比較的簡単にアメリカ大陸へ到達できるようです。その上、ホピの人々の顔立ちは日本人と同じと言ってもいいくらいよく似ています。

登場人物

タイオワ:発音的にダワ/タワと似ていることから太陽（サンフェイスカチナ）と考えられます。

ソツナン　：英語でHeart of the sky（空の中心）と呼ばれる神のような存在。カチナドールでも度々目にすることがある。

スパイダーウーマン：スパイダーグランドマザーと呼ばれることもある。ナヴァホ等他の部族

の中にも存在する神のような存在。

ポクァンホヤとパロンガゥホヤ：Warrior Twin（双子の戦士）とも呼ばれる。カチナドールでも度々目にすることがある。

マサウ：伝説上では第4の世界の番人とされていますが、生と死を司る神とも言われている。カチナドールとしてもポピュラー。